

PHD

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

LETTER

92

2004.9

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり (Peace) 健康づくり (Health) を担う人材をつくる (Human Development) 運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
編集人：藤野 達也
住所：〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202
TEL 078-351-4892 FAX 078-351-4867
E-mail: phd@mb1.kisweb.ne.jp
URL: <http://www.kisweb.ne.jp/phd>
定価：100円
郵便振替口座：財団法人ピー・エイチ・ディー協会
01110-6-29688

- 私たちが変わるための試み⑥ . . . P.3
- 研修生レポート . . . P.4-5
- フォローアップレポート (ビルマ) . . . P.6-7



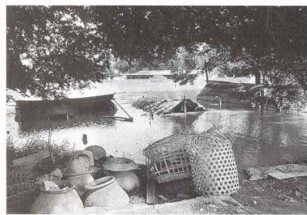
村の農耕は牛が主役。
ところがここでも少しずつ機械が
入ってきている。
機械は壊れるから修理が必要。
そこで出張修理をしてくれる彼の出番。
村の仕事も少しずつ変わってきている。

ビルマ、マンドラレー近郊 撮影 FUJINO T.

東西南北 問題解決 取組日記

マンダレーでも水害が

日本でも新潟、福井で洪水の被害があったが、ビルマのマンダレーでも、川の増水で避難生活を送る人々に出会った。町の西を流れるエヤワディ川は雨季の雨でもう少しで堤が水が越すところまでできてしまっている。今までその内側に小屋掛けをして住んでいた人々が、小屋をたたみ、町の中心にある公共の場所に移っていた。通りがかった時には赤十字による食糧配給と巡回診療が行われていた。その数はざっと50世帯程。大変は大変だろうけど、元々、川の端で住む人たちは、整った生活を送っていたわけではなく、自然が相手の災害なら致し方ないかといったところか。町の人々も



増水で水没した川べりの家

同行していた村の人々もことさら騒ぎ立てるでもなく、淡々としているように見える。避難場所は大きなお祭りの時に、夜を過ぎず屋根だけの建物なのだが、そこが与えられるだけでも、マシなのだろう。ヤンゴンに戻る夜行バスも、道の何か所かが冠水し、エンジンにかかりそうなきりぎりのところまで水がきていて、通るのもヒヤヒヤ。これをチャンスにと、車輪が大きくエンジンの位置も高いトラクターの運転手が渡し舟ならぬ渡し車でひと稼ぎしていた。いろいろところで少々のことには負けないくまじさをこの国では感じる。

ロンジーはいつまで

ビルマでは男性はロンジー、女性はタメイと呼ばれるスカート状の布をはいている。女性はともかく、男性のそれを見ることでビルマに来たことを感じるのだが、来るたびに少しずつ

ボン姿が増えてきている。ヤンゴンでは女性のジーンズ姿もチラホラ。タイやインドでも、男性のこの姿は農村では見かける服装だが、町でも公の場でもいけるのがここビルマ。それでも、経済や文化のグローバリゼーションの流れからすると近い将来変わってしまうのかもしれない。

もっとお米を食べよう…

JICA兵庫の人から電話があり、食糧問題について話せる人を探しているのだが、とのこと。アジアの村の状況に絡めてならウチでもできると返事をすると、兵庫県農林水産部の開催するおいしいごはんを食べよう県民運動推進協議会での講演を頼みたいとのこと。PHDがアジア・南太平洋の村とおつきあいをする中で、彼らの農業や食が、日本とつながっていることはこの会報でも度々ふれてきている。

それにアジアの村のスライドははさんで「だれのための食のグローバリゼーション」という演題をつけた。日本でお米の消費が減ったのは、米以外のものを食べるようになったわけで、それは国内の問題だけではないこと。経済力があることが世界の食の不公平な分配をもたらしていることに重点をおいてお話をした。翌日、学校給食を担当する栄養士の先生から別の場で同じような話をして欲しいとの連絡が入り、喜んでお引き受けした。このようにPHDの働きが「日本から一方的に…してあげる」ことではなく、「草の根の交流からお互いが学んで、それぞれの生活の場で行動する」につながることに立れば嬉しく思う。

おしゃれな コーヒーチェーンの仕入先

予告しながら前号に書けなかった北タイのコーヒー畑についても、前回の

講演の中で扱ったので、ここでご報告したい。

ビルマ国境に近いタイ北部の山岳地域の中で、PHDはカレンの人々とおつきあいをし毎年のように村を訪ねている。チェンマイにある私たちのカウンターパートのタイ・カレン・バプテスト会議のすすめで、10年程前に一度訪ねた村に昨年暮れに再び出かけてみた。すると以前は細々とやっていたコーヒー栽培が山の斜面一帯に広がり、30軒ある家々の屋根には収穫された生豆が干されていた。一軒の家に上がらせてもらうと、部屋の片隅にきれいなパンフレットがあった。手にとってみると日本でも有名なアメリカのコーヒーチェーンがこの豆をフェアトレード（公正な貿易）として宣伝しているものだった。びっくりして家の人に話を聞くと、アメリカのキリスト教の宣教師から話を聞いたNGO関係者がコーヒー会社に取次いだところ、品質が認められ2002年から取り引きが始まったという。無農薬栽培も評価の対象になったようだ。コーヒーの値は他の作物に比べてとてもいい。一番の人は昨シーズン10万パーツ（約30万円）の売上げがあったそうだ。チェンマイから車で10時間、他にこれといった産物のなかったこの村に、世界につながる商売の話。

観光客でにぎわうチェンマイのナイトバザールにあるこのチェーンの店に寄って見ると、村で話を聞いた家のおばあさんが販促用のカレンダーに登場していた。このつながりが双方が満足でき、継続すれば良い話なのかもしれない。外とのつきあいの経験が少ない村びとと、したたかな国際的な企業との関係が本当にフェアでいけるのだろうか。村からの豆の買取値をチェンマイの店の売値を較べるだけでも、難しさを感じてしまった。品質の維持や量の確保が会社の望むレベルで果たせなければ、取引は継続されないかもしれない。コーヒー生産に依存する前に、このことに村びとが気づけばいいのだが。

総理事代行 藤野達也

私たちが変わるための試み ⑥ 「出会いから始まる…」

兵庫県三日月町立
三日月小学校教員
土居 哲也 さん



PHDとの出会い

私は兵庫県教育委員会が実施する社会体験研修に参加することになった。学校現場を離れ、民間企業などで働くことで、教員の資質向上を目的としている。そこで、PHD協会にお願いして研修させていただくこととなった。研修期間は7月の1ヵ月間。

私がPHD協会の研修先を選んだのは、国際協力という仕事に興味があったからだ。以前同じ職場にPHD協会が企画するスタディツアーに参加した人がいて話を聞いていた。アジアでの活動ってどんなことをしているのだろう、NGOって何？という興味が私を動かした。神戸通勤の魅力という少し不純な動機もありつつ、しかし良いきっかけにしたいという思いが強かった。

研修がスタート

初日、藤野さんについて神戸学院大学へ。国際協力の講義の講師として藤野さんが話をされる。分かっていたことだが、自分が何も知らないことがよく分かる。この時点で、楽しみというより少々不安を覚えた。講義の中で、「物やお金を援助しても無くなればすぐに次が必要になる。だから村を良くしようとする人を育てる」というPHDの考え方は素晴らしいと感じた。また日本が全て良いのではなく、日本にもたくさん問題があり、それを研修生と勉強するという。とても意義深く思い、自分の方こそ勉強したいと思った。

優しさの集まるどころ

PHDでの仕事は、会費を振り込んでいただいた方の会員番号調べや、書き損じ葉書キャンペーンで送られてきた葉書の整理が主な仕事であった。日本全国に会員の方がおられ、24年間に及ぶPHDの地道な活動を感じさせた。運営が会費と寄附で成り立っていること

に正直驚いた。送っていただく葉書は、お年玉年賀の当たりをわざわざ別にして送ってくださる方がありうれしくなる。また、PHD企画のスタディツアーに参加しようとする人は、全国から集まってこられる。その思いの強さに圧倒された。私自身がこのような活動に参加したことが無く、寄附は何かの災害が起こった時にするくらいだった。社会問題に正面から向き合い、何とかしたいと頑張る人たちの活動を知ることができたことは、私も何かしなければという気持ちを生んだ。PHDの仕事は、人とつながっていく仕事、そして、様々な人の応援と優しさが集まるどころだと感じた。

研修生との出会い

大阪薫英女子短期大学に同行した時のことである。講義内容はインドネシアからの研修生アフリタさんとの交流から学ぶというもの。研修生が話すことは生き生きと聞いているものに伝わってくる。スライドがあるので村の様子もよく分かりとても興味深い。同じ年の学生さんということもあり、たくさん質問が出て内容も深まった。インドネシアの歌を歌ってほしいと請われて、恥ずかしそうに歌った歌は、日本の歌とは全く違う、とてもきれいな旋律だった。まるでインドネシアの村がそこに広がったかのような感じ。研修生の方と話をすると知らない国への興味と同時に、そのつながりの不思議さを感じる。ぜひ、このような経験を多くの子どもたちにも味わわせてやりたいと思った。

また、研修生は、日本にきて自分の村を良くするための技術を学びたいという意欲にあふれている。その証拠に私が出会った7月のはじめは、日本に来て3ヵ月ほどたったところだったが、日本語をほぼ聞き取れるようになって

いた。この研修意欲に大いに刺激された。

中野宗嗣さんと 藤井誠次さんとの出会い

お二人とも有機農業へのこだわりがすごい。牛や鶏を飼い、堆肥を作り、作物を育てる。それは簡単なことではない。今まで私は、安さで買い物をしてきた。実際に農作業を体験してみるとその大変さ分かる。あまり安すぎるのは逆に何かあるのではと疑いたくなる。安全な農作物を求める人が増えれば、同じような農家が増えていくのだろう。このこだわりを多くの人に理解して欲しかった。

出会い

私は、PHDでたくさんの方に会えることができた。それぞれの方がそれぞれの方面でこだわって生活されている。それはそれぞれに自分なりの問題意識を持っているに他ならない。研修生の国も、日本にも課題はたくさんある。それを私自身どう考えていくのか。いろんな方々に出会い、違うもの見方や考え方を教わることができ、そんなつながりの中から自分なりに考えることができる。それができるのがPHDの良さだと分かる。

私にとってPHDでの研修はとても意義深い価値ある体験となった。そして、大きな自信である。それは、ここでの体験や知り得た知識の量でなく、自分が動いた、一歩踏み出したということでもある。そういう意味からも、私を快く受け入れてくださったPHD協会のみなさんには心より感謝したい。

22期生 6月上旬～7月下旬

冷夏だった昨年の反動か、厳しい暑さの続く今年の夏。涼しい山村出身のアフリタさんは少々夏バテ気味。日中の気温なら日本以上のフィリピン、ビルマ出身の2人は元気ですが、夜でも気温が下がらないヒートアイランド現象には驚いています。(納堂邦弘)

研修生レポート

ハイディ・マルセロ・マリアーノさん (フィリピン、女性、24才)

- 一農業研修一
- 1.橋本慎司(兵庫県市島町)
- 2.寺田正文(兵庫県出石町)
- 3.藤井誠次(神戸市北区)
- 一しょうゆ工場見学一
- 4.(株)秦組本店(兵庫県三原町)
- 5.キッコーマン高砂工場(高砂市)
- 6.足立醸造(株)(兵庫県加美町)
- ※5、6は22期生3名で見学

<敬称略>

ハイディさんの村では、1960年代中頃から農業や化学肥料を大量に使用する稲と玉ネギの単一栽培が行われています。現地のNGOや帰国した研修生たちが有機農業や伝統品種の保護を広げる活動をしています。まだまだ少数派。多くの村人は中国系の商人によって種、農薬、化学肥料のセットを買わされた上に、売るときも安く買いたたかれたりとかかなり厳しい環境の中でなんとか生計を立てています。



納豆作りを学ぶ(出石町)

こうしてハイディさんは、日本の有機農業技術はもとより農産物加工や流通についての研修にも力を入れています。つまり、有機農産物をそのまま売ること以外に、何かに加工し付加価値をつけて消費者に直接売ると収入が増えて生活が安定する、という道を探りたいと考えているのです。

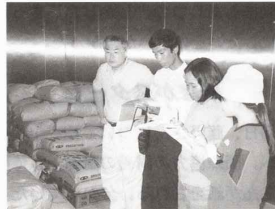
例えば、玉ネギ。淡路島の土産物屋を訪ねてみると、スープ、カレー、せんべい、焼酎、ジャム、漬物など様々な淡路島産の玉ネギを使用した加工品があり、ハイディさんはびっくり。特にオニオンスープは「おいしい！」と気に入ったようで、「フィリピンにも売れるかも」と話しています。

また、昨年度の研修生アンディさんが目をつけた有機大豆による豆腐、豆乳作りは、地元行政からの協力も取りつけマーケティング調査などが始まっているそう

で、にわかに現実味を帯びてきています。

そこでハイディさんは、大豆加工の知識を広げるため、寺田さんの所では納豆作りに挑戦。最初は苦手だった納豆も今ではすっかり食べられるようになりました。

そして、小規模ながらこだわりの醤油を作っている秦組本店と足立醸造を訪ね、醤油作りの流れや難しさを丁寧に教えていただきました。ハイディさんは「堆肥作りも同じだったけれど、正しく菌を使って何かを発酵させると原料よりも良いものができるのはすごい」と発酵食品の奥の深さを感じたようでした。



醤油の原料について話を聞く(加美町)

ゾーウィンさん(ビルマ、男性、34才)

- 一農業研修一
- 1.渋谷喜男(神戸市西区)
- 2.牛尾武博(兵庫県市川町)
- 3.中野宗嗣(兵庫県春日町)

<敬称略>

年齢的なこともあり日本語には少し苦しんでいるゾーウィンさんですが、身振り手振り、擬態語を上手に使って何とかコミュニケーションを取ろうとしてくれます。そして、訪れる先で演奏する特技の笛はなかなか好評。ただ静かな農村の夕食の場で吹いた時は、テストを控えた近所の小学生から苦情が入るといったこともありました。...

日本語はまだ苦手ですが「農作業の飲み込みの早さ、丁寧さ、気配りなどはさすが」と指導者の方々の評価は高く、彼自身も日本の有機農業の様々な技術や工夫に日々驚いているようです。

トゥンティンさん(93年度)たちが

村で実践している疎植の米作りは、渋谷さんの所で田植えをして体験することができました。「2～3本の苗を30cmぐらいの間隔で植えた方が沢山のお米がとれるのを確かめたい」と今から稲刈りを楽しみにしています。

また、アイガモを使った稲作にも特に関心を持ったようです。ゾーウィンさんの村では、10～15人の女性からなる草取りグループに頼んで全て手作業でしています。「アイガモが泳いだり泳ぎ回りながら害虫や草を食べ、水が濁って新しい草が生えにくくなって、糞が肥料になるとはすごい。」と熱く話してくれました。

低温殺菌牛乳(乳牛約10頭)と稲(アイガモ農法)と有機野菜作りを組み合わせで営んでいる中野さんの所では、

牛糞が堆肥になり、堆肥が畑に入って、おいしい野菜や牧草を育て、それらを人や牛が食べる、というサイクルにとっても感心したようです。ゾーウィンさんの家でも農作業用の牛など4頭を飼っていますので、「これからは糞を集めて堆肥を作るようにしたい」と身近なところに貴重な資源があることに気がついたようでした。



「良い土が良い野菜を作りますね」(市川町)

アフリタ(通称リタ)さん (インドネシア、女性、19才)

- 一保育・洋裁研修一
- 1.はらっぱ保育所(西宮市)
- 2.高橋武子(三木市)
- 3.くらふと・ぎやらりー多田(芦屋市)
- 4.瀬加保育所(兵庫県市川町)

<敬称略>

リタさんの最初の研修先は、0～5才児が約30人という比較的小規模な“はらっぱ保育所”。有機栽培の食材で昼食を作るなど、こだわりの保育所です。7月には少し大所帯で年齢毎にクラスが分かれている“瀬加保育所”へ。農村の自然の中で広い遊び場やプールがあります。

子どもに対する思いや接し方に大差はありませんが、規模や子どもの家庭環境という点では対照的な2つの保育所を経験することで、リタさんは色々と比較しながら保育のみならず日本社

帰国研修生短信 (ビルマ)

▼ティンアンウィンさん(92年度)

国際NGO“CARE Myanmar”でエイズ対策関係の仕事をしている。国内外問わず出張が多く、暇な時で1カ月の半分くらい、忙しいと1週間くらいしか家に帰れない。

「トゥンティンさんが実質的なリーダーとなり、10年かけてゆくりと有機農業やグループ活動に取り組んできたから、村の状況は少しずつ良くなってきていると思う」と話す。村のグループの良さ相談役。

▼トゥンティンさん(93年度)

牛を10頭(♂4、♀6)飼い、その糞や購入する鶏糞を使って堆肥を作り、田畑に入れている。日本で学んだ疎植の稲作りの成果は他の田んぼに比べて一目瞭然。周りの田んぼは干ばつや密植のため育ちが悪く、ほとんど全滅と

会に関する理解も深めることができたようです。

まずは、日本ではどんなことに気をつけながら、子どもたちの世話をしているのかについて。例えば、食事前の石けんを使った手洗い、栄養バランスのとれた食事やおやつ、食後の歯磨き、規則正しい昼寝や本、歌の時間など。「私の村ではやらないことばかり。お母さんたちが知らないから」と話すリタさん。身近なところからでも村の生活改善ができることを知りました。

そして日本社会についてですが、そもそも夕べ村に保育所はありません。むしろ「必要ない」と言った方がいいかもしれません。家族や親戚、近所の人がみんなで面倒をみるので、まさに村全体が保育所という感じです。そういう環境で育ったリタさんにとって、日本の都市部の保育所では1才に満たない子が朝から晩まで預けられてい

る、という状況を理解するのはなかなか難しいことです。「保育所の生活はとてもしんどいけれど、お父さん、お母さんと一緒にいられるのとどっちがいいのかなー」。

研修指導者ノートの中に、「私の村は貧しい。不便」というリタさんに『便利で豊かだけど、幸福とは言えないかもしれない』と伝えるのは難しく、哀しいことです」とありました。これは、他の研修生とも一緒にゆくりと時間をかけてこれからの研修で考えていくテーマの一つです。



「水遊びは楽しいです！」(市川町)



いうところが多かったが、彼の田んぼは株数も多く、稲穂がたくさんできていた。種もみの量も他の村人の4分の1以下。

グループのリーダーとしても精力的に様々な活動を行っている。村人から集めた寄附で無償の奨学金制度(今年小学生9人、中学生1人へ支給)を作ったり、農業グループのメンバーと農民対象の相互扶助的な小規模融資や米銀行(種もみを貸し、稲刈り後利子分をつけて返す)、移動図書館、農閑期を利用した課外授業など、全てボランティアで行っている。

▼ムームーさん(93年度)

引き続きYMCA幼稚園の保育。園児数は約40人、保育士は計4人。歯磨きをさせたいが歯ブラシがないので食後に水を飲ますことしかできないなど、理想と現実の違いを日々感じながらも、栄養のバランスを考えたおやつを作

たりして頑張っている。

▼タウンタウンさん(94年度)

昨年9月にマレーシアから戻る。2年間レストランで厨房とウェイターの間で注文を整理する仕事をしていたとのこと。今はマングレー近くの町に住み、出版社で営業の仕事をしている。村を訪問すると義理堅く顔を出してくれるが、考え方の違いからグループのメンバーとの溝があり、今は離れた状態。

▼カインソー(カイン)さん(96年度)と ▼スウェウィンさん(02年度)

昨年10月にPHD史上初の研修生同士の結婚。カインさんがイエゴ村に来て、スウェウィンさん実家敷地内の牛舎を改装して住んでいる。妊娠4ヵ月(11月出産予定)。

結婚後自分たちで買った1エーカーと借地(1エーカー)でゴマを中心に

いくつか野菜を作る。7月からは稲（ビルマ在来種）を作る予定。6月はゴマの収穫作業に忙しかっていた。カインさんは力仕事はしないようにしているらしいが、台所も地べたにしゃがんで調理しなければならぬなど、妊婦として気をつけた方が良くということがいくつか見られたので、寒者さんからアドバイスしてもらった（次ページ参照）。

スウェウィンさんは、アイガモ水稲栽培の失敗の原因を、アイガモ屋に言われるまま最初から1000羽も買ってしまい世話をその人に任せてしまったこと、世話も実は全然上手くなかったこと、天候不順で水不足だったこと、とトゥンティンさんと共に整理。「今後土地を少しずつ増やし、アイガモでや

りやすい農地ができれば自分で管理できる少ない数で再挑戦したい」と話す。



結婚おめでとう！（新居の前にて）

▼ケンターウエ（マウエ）さん（03年度）
通信制大学の卒業試験が10月にあるので、それが終わるまでは勉強と家事、農業の手伝いが中心になる。

今後の中期的な活動についてはトゥ

ンティンさんを中心に研修生同士で話し合い、タダインシェ村で行っているグループ活動のいくつかをイエボ村で立ちあげる準備と看護師になることを目指したいと考えている。「看護師になり何年か経験を積んでから村に戻って診療所で働くというのが最も現実的で村のためになる」と他の研修生たちも賛成している。

村に保育園を作りたい思いもあるが、限られた人材や今の社会情勢ではまだ難しい。近いうちに来日前からしていた小学校の先生ボランティア（週1～2回）を再開し、日本や保健衛生の話をする予定。

フォローアップレポート （ビルマ）

6月12日～20日まで、3名の研修指導者の方々とビルマを訪れ、帰国した研修生たちの活動や現地の農業、保健衛生の現状を調査してきました。指導者の方々からのレポート（一部抜粋）を中心に報告します。帰国研修生短信と合わせてお読み下さい。

そが いっさく 曾我 一作さん

兵庫県立但馬農業高校教師。専門は畜産だが、農業全般に幅広い知識を持つ。PHDとの関わりは20年近い。日本人離れた豪快な人柄が魅力。

「村づくりは着実に、ゆったりと進んでいる。農業を核にした自立の村づくりへの夢はひろがる。現地研究センターを設置しては。」

上記が私の感想の結論である。

村づくりはトゥンティンさんが核となり、村の青年数人と共にお金やお米などを融通し合う互助組織を結成していた。原資は彼らの日本研修中のわずかな小遣いの残りを出し合うことで行っている。わずかであるが「原資」との申し入れに、「日本から援助されているのではないか、それなら返さなくてもいい、という思いを起させないためにも日本人の資金提供は断っている。」

この言葉に表わされるように、自立や責任、計画性などを追求しているグループである。今後問題も出てくるだ

ろうが、この精神で継続できるよう一杯の精神的支援を送りたい。他にも移動図書館や補習授業、毎年女性を含めた数人を先進地へ研修に行かせたりとその活動には目を見張るものがあった。

トゥンティンさんは帰国後、試験田を設けて一つ一つ確認をしながら日本の技術を導入していた。その一つが疎植。村人はこの技術に感心して周囲にも少しずつ広まっている。これにより種籾数の減少、田植え労働の軽減など目に見える成果があるが、全体的にはまだ慣行の密植栽培が一般的であった。

田を見ると出穂や草丈などが違い、他品種が混じっている様子がうかがわれた。その地にあった品種

を選び、塩水に種もみを入れる選抜法などにより質の高い種もみを確保できれば、トゥンティンさんが目指しているより素晴らしい有機米ができるのではないだろうか。

また、彼は鶏糞、米ぬか、ゴマの茎葉、牛糞堆肥などを惜しげもなく水田に投入して、土作りに努力していた。この努力が本当に意味あるようになるためには土壌分析が必要だろう。未熟堆肥によるガスの害などが心配されるからだ。

いずれにしても、その地に合った適正技術を決定するための試験田を設置し、彼ら自身が分析、記録などを行っていきけるような丁寧な援助が、今の彼らの努力を結実させる手だな、と痛感した。



トゥンティンさんの田んぼ見学
（左から曾我さん、渋谷さん、
トゥンティンさん、スウェウィンさん）

しぶたに ふきお 渋谷 富喜男さん

神戸市西区で有機農業を営む。89年以降ほぼ毎年研修生を受け入れている。PHDのツアーに「病みつき」になり、インドネシア、タイに引き続いての現地訪問。

「私の国は日本より50年遅れています。村に車はありません。村一番のお金持ちは新しい自転車を持った人です」12年前の研修生ウィンさんの言葉です。この国を一度見てみたいという気持ちを持っていたので、今回のツアーには



ウィンさん宅でオリエンテーション

かんじゅ めぐみ 寒者 恵さん

三木市健康課勤務（保健師）。91年から保健衛生研修を引き受けてもらっている。研修生訪問は今回で4カ国目。今は「冬ソナ」にはまっていて、ビルマでも韓国ドラマがあり、盛り上がる。

保健衛生の担当者として、ビルマ人の暮らし、特に農村の暮らしには特別な興味がありました。

米飯が食事の中心で、おかずは本当に副食。野菜の種類は豊富（オクラ、インゲン豆、トマト、玉ネギ、ピーマンなど）で、あとは家の側にある木の葉やニンニク、唐辛子などを組み合わせ、豚肉と一緒に煮たりしたもの为主流です。味付けは、塩、こしょう、味の素、魚をベースにした味噌のようなものを入れます。野菜は少し煮過ぎのうえ、魚もカリカリに揚げ過ぎたものが多かったのが問題だと思いました。

台所は、地面にカマドを作り、薪を使用します。カインさんとスウェウィンさんの新居の台所も同様で、カイン

興味深く参加させていただきました。

雨の後の熱帯地方の蒸し暑さには参ってしまいましたが、そんな気候で生活している人の暮らしを少しでも多く見たいという気からウインさんたちの住むタダインシェ村に入りました。ここ1～2年で中国製のオートバイがかなり普及してきたようですが、確かに日本の40～50年前の農村風景を思わせるものでした。

村では化学肥料をたくさん使っているようですが、チッソだけの肥料であり、これだけで稲作りをしていると病虫害が多発するだろうと思われました。化学肥料、農薬が入ってきても、その使い方を指導する人がいないのが最大の問題でしょう。研修生たちは、牛糞・鶏糞を使った有機農業に取り組んでいました。村の人達がそれを見て、有機農業の大切



「調理法の幅を広げるように」と調理実習
（左からマウエさん、ムームーさん）

さんは現在妊娠のため、使用するのがつらいのでは…と思いました。ウインさんの家は、村の模範になるようにと台所は立ったまま使用できるように腰の高さにコンロや流し台がありました。研修生自身が村人に良いお手本を見せるといことは今後も続けてほしいと思います。

性教育も母親学級も何もありませんし、母親が娘に教えているわけでもありませんが、村のみんなが、自分のことのように子育てや妊娠や出産など生活に関わりのあることを教え合いながら協力しているのだなあということは



マウエさんのササゲ豆畑にて。
「土寄せした方がいいよ」とアドバイス。

さを知ることが大事だと思います。

私たちが4～5日見ただけの熱帯の農業は、まだまだわからないところがたくさんあります。地力の消耗も激しいだろうし、そこでの土作りをどうするのか。日本の技術がどこまで通用するのか。やっぱり、この国の伝統的な農業技術の上に、日本で学んだ新しい技術を加えていくことが良いでしょうか。私たちが彼らにできることは、創意工夫するヒントを与えられたら良いのではないのでしょうか。

実感できました。

研修生には、手洗いの徹底や（マラリアを持つ）蚊の発生源となる水溜りを少なくすることなど基本的なことをアドバイスしました。結果はすぐに現れないけれど、あきらめないでほしいということ、何か一つでも改善するところがあるのなら、まず自分がそのお手本を示して、それを家族にしてもらう、次に村の人に協力を頼むように順を追って気長に実践してほしいことなどを話すことができました。

チェーズベエ（ありがとう）、ビルマの研修生。ガンバレ!!



村の産婆さん（左）と話す

継続したご支援 ありがとうございます。

前回91号の会報とともに今年度会費納入のお願いチラシを同封させていたいただきました。たくさんのボランティアさんとの発送作業が終了し、ホッと一息ついたところで、たくさんの方からの会費納入が続きしました。この時期、6～7月の2ヵ月間で年間目標の半分にあたる400万円を目標としています。今年の結果は、金額は目標をやや下回る約388万円でした。ところが近年同様、件数は増加しています。全体の件数は減少していますが、この時期の件数は増加する傾向にあります。チラシを作成した本人としては、チラシに伝えていただき、うれしく思っています。そして、今年度は全体の件数も増加するような働きかけの必要性を感じています。

そこで、皆様にご協力をお願いします。

お知り合いの方にPHD協会のことをご紹介していただけませんか。継続会員の方には継続してお支えいただき感謝しています。しかし、一年の間には、どうしても何らかの理由で退会される方がおられ、近年の傾向としては、その退会者が新規会員よりも上回っているのです。それが前述した全体の件数の減少に大きく影響しています。会費収入を安定したものにするためには新規会員を増やす必要があります。

モノやお金でなく人作りを通しアジア・南太平洋の生活向上に協力し、彼らとの交流を通し私たちも日々の生活を見なおす。アジア・南太平洋の村の青年とモノやお金ではないつながりを一緒に作りませんか。資料をお送りします。事務所までご連絡ください。

古本妃留美

○月×日のPHD協会

<今年の夏は暑かった!!>

職員 古本 春秋はどっちつかずの気候に体が対応せず、冬は血行不良で不調。夏が一年のうち一番いい調子。南方向きの体のづくり。

職員 寺田 沖縄産の28種類からなるお茶、17種類の漢方茶、高麗人参茶、さらに寝る前のハーブティーとお茶マニアとなって体調維持。応ご相談。

職員 芳田 良く食べ、良く飲み、良く汗をかくことで夏を乗り切る。てつきり飲むのはアルコールかと思っただけ、それはほんのたまにとのこと。

職員 佐々木 ウコン茶を1日3杯が習慣に。信じて飲むことで効き目が増すらしい。薬効と精神力の相乗効果で体重減と健康維持を実現。

実習生 土居 何はともあれ、食べるが一番。しかし30代は余分なカロリーはすぐ腹のぜい肉となり、夏バテならぬ夏プタに。

職員 納堂 夏バテには縁なく対策はなし。しかし斜め前に座る職員が空手を始めたことに脅威を感じ、毎夜、筋力トレーニングを行い、有事に備える。

職員 藤野 日本の暑さに閉口し、アジアの村へ避暑にと冗談を言っていたら、本当に。ヤンゴン、マンダレーと気温は低く、良く眠れた1週間の出張。

以上、ごはんをゆっくり食べる順
(ゆっくりかんで食べましょう)

□図書のご紹介 「茶色の朝」
物語：フランク・パヴロフ
訳：藤本一勇
大月書店 (1,050円)

国内の問題、海外で起こっていること、それに関わっている日本のこと。「おかしい!」と感じながら、いつもと変わらない生活を続けている自分。この生活がこれから来る「取り返しがつきにくいこと」につながっていると気づかずに…。私たちにできることはシンプルに「考え続けること」。ぜひ、お勧めします。事務所にも貸出用があります。

PHD NEWS

□会費・ご寄附寄託状況

2004年5月	48件	1,010,860円
6月	381件	2,814,013円
7月	424件	3,566,035円
合計	853件	7,390,908円

以上の通り、多くの皆様よりご浄財を頂戴しました。会費では、依然として厳しい経済情勢の中、皆様からの心温まるご協力に厚くお礼を申し上げます。今後とも変わらぬご支援をお願いします。

□第14期林業体験宿泊「枝打」

in丹波大山

11月上旬に1泊2日で植林の一工程である「枝打ち・間伐」の作業を行う予定です。日本の山の木が売れないため、私たちがする作業も減っています。山と私たちの関係や森林と地球環境などについて考えるきっかけになればいいなと思います。ぜひご参加ください。

□第22回タイスタディツアー

参加者募集

12月下旬の約10日間。帰国した研修生の活動を見学し、村人の家にホームステイをしてタイの生活を体験します。また、北タイの山岳民族カレンの村を訪ね、草木染めの伝統織物グループとの交流もします。

□東日本・西日本研修旅行のご案内

一年の活動報告やお礼、研修生の社会学習などを目的とした研修旅行を行います。各地で交流会を予定しています。お近くの方にはご案内致しますので、是非研修生に会いに来て下さい。

<予定>

- ・東日本 (11月中旬～下旬)
愛知-静岡-神奈川-東京
-山梨-長野-岐阜
- ・西日本 (1月中旬～下旬)
宮崎-鹿児島-熊本-大分-福岡
-山口-広島-愛媛-岡山